

弟を泣かせるくらいなら、自分には諦めてしまおう。でも、じゃあ、どうしてあんなこと？」「まかりまちがつちやうと、マリクもバシアさんも、僕も泣くことになつちやうかな…バシアさんに、ちよつと落ち着いてもらわないと」とはいえ、どうしていいかわからない。何より安道は、自分の心が不思議だった。「なんで、僕」嫌じやないんだろう。普通だつたら、あんなこと言われたら、いつぺんで嫌いになつてしまうはずなのに、初々しい羞じらいぶりに、むしろ心を動かされてる。ああ、こんな時、護だつたらどうするだろう？」「バシアさんを迷わず食つちやうな。でもつて、それをマリクに言つちやう。で、全部おしまいだ」それは嫌だな、と安道は思う。マリクのことは好きだ。結婚話が出たら腹が立つぐらいには、だが、異父兄と複雑な関係になつて泣かせるくらいなら、今のうちにきつぱり別れても…いや、それも変な話だな？」「たぶん、マリクは何も知らないんだろうし」知つたら飛んでくるはずだ。兄と恋人を共有することを了承でもしていない限り。「そういうタイプじゃないよな、マリクも。わかんないけど」まだ、倦怠期に入るほど長くつきあつてもいない。複数の妻を娶るのが当たり前の国から来ているから、安道とは感覚が違ふ可能性もあるが、もしそうだとするなら、マリ

クの方が自分から、「実はバシアも」というだろう。「それとも単に、バシアさん、僕の反応を見たかっただけなのかな」弟の恋人がどれだけ淫乱で、誘惑に弱いかわかりたかつた、とか？」「どうだろう？。そんなこと試して、何になる？」マリクは可愛い。こちらから誘うと喜ぶ。誘われるより誘う方が好きなので、それが楽しくてつきあつている部分もある。だが、バシア・バスイールなら、用があれば向こうから来る、こちらから行く必要はない。だいたい、本気で落とす気があるなら、手口はもつているはずだ。あつという間に陥落させられることだろう。安道はベッドから出て、シャワーを浴びた。「で、僕はなんで落ち着いてるんだ？」単に、好かれてるのが嬉しい？のかな？もしかして、背徳感に酔つてるとか？いや、それつて何に対して後ろめたいんだ？マリクと結婚してるわけでも、まして一緒に住んでるわけでもないのに？安道は身体を乾かし、台所で朝食の準備を始めた。ラジオの米軍放送が、昔の曲を流している。ハンク・シカロー作曲の「ノー・タイム」だ。安道もつられて、歌い出す。タイトル通り、君に割いてやる時間なんかはないよ、という皮肉な歌だが、子役あがりのアイドルの発声は美しい。少しかすれた高い声で「The grass is all w a a y s g r e e n e r g r o w i n , o n t h e o t h e r s i d e .」と歌う。隣の芝生は青いだろうけど、僕のところへ逃げ込まれても困ると。「…：：：そうか、わかつててからか」バシアにとつての安道は隣の芝生で、安道にとつてのバシアも隣の芝生なのだ。だか

ら少し、よく思える。バシアがマリクより巧いか、相性がいいかどうか、今の時点でわかるわけもなく、だから都合のいい夢を見られる。そこまでお互いわかつているから、一歩を踏み出さないでいられる。「バシアさん、すこし心が弱つてるのかもしれない」自分に頼りきりだつた弟が、言えないヨレヨレの日本人に夢中になつて、妙に張り切つている。納得できない現状に理由を求めて、弟の恋人を美化している可能性はある。だとしたら、彼の仕事を肯定してあげられれば…？」「不思議なものだよな」バシアさん、好きなタイプだし、つきあうのもマリクより楽そうなのに。「護以外は、誰でも同じだと思つてたのにな…：：」そうじゃなかつたな、と思ひ浮かべるのは、やはりマリクの笑顔の方で…。

「ないよ」「いよいよ」「いやいやいやいや」何を比べてるんだ。抵抗できなくて…。」ど、つきあう相手は選ぶから、「おまえが必要なんだ」と囁かれると、どんな淫らごととで、護はわかりやすかつた。面倒臭い兄貴肌で、機嫌はぜんぶ顔に出る。モチろけるトで筋が通つている。安道は直球を投げ込んでいる。「おまえが大事なあ」最初の会つた日から、バシアに好感を抱いていた。「どうしよう…：：」「つまりあれは、真面目な告白なんだろう。」だつて、バシアさんで、策士じゃないし「が、内心、動揺していた。たぶん」と、その場をごまかして別れた。真意をはかりかねて、「マリクが僕に夢中だから、それで悪わされてるだけですよ、思いもよらない返事が返ってきた。」「…：：どうやら私は、あなたにやましい気持ちを抱いているようです」昨日、安道が定時で帰つてくると、バシアがアパートの階段の前で、物思いにふけつ

「ないよ」「いよいよ」「いやいやいやいや」何を比べてるんだ。抵抗できなくて…。」ど、つきあう相手は選ぶから、「おまえが必要なんだ」と囁かれると、どんな淫らごととで、護はわかりやすかつた。面倒臭い兄貴肌で、機嫌はぜんぶ顔に出る。モチろけるトで筋が通つている。安道は直球を投げ込んでいる。「おまえが大事なあ」最初の会つた日から、バシアに好感を抱いていた。「どうしよう…：：」「つまりあれは、真面目な告白なんだろう。」だつて、バシアさんで、策士じゃないし「が、内心、動揺していた。たぶん」と、その場をごまかして別れた。真意をはかりかねて、「マリクが僕に夢中だから、それで悪わされてるだけですよ、思いもよらない返事が返ってきた。」「…：：どうやら私は、あなたにやましい気持ちを抱いているようです」昨日、安道が定時で帰つてくると、バシアがアパートの階段の前で、物思いにふけつ

「…：：あ、あれっ？」安道は首をひねった。「今、なんの夢をみていた？」「夢だよな？」「現実ではない。身体にはまったく違和感がない。むしろ目覚めは爽やかで、ぐつすり眠つたという満足感の強い。昨日の夕方のおれが、夢かな？」

「アンダー」どうしたんです、バシアさん？」「あなたに触れたい」「え？」「そつと抱きしめられて、安道はため息をついた。「だめですよ、バシアさん、そんな冗談」バシアは安道の耳元で低く囁くように、「嫌ですか、どうしても」「いや、その、どうしても、では」「それなら」舌で舌を絡め取られて、言葉が出なくなった。服を乱され、滑り込んできた掌に翻弄されて、トロンとなつて見上げてみると、浴室に連れ込まれて何度も選かされて…。

「隣のアンドー」バシアさん？」「あなたに触れたい」「え？」「そつと抱きしめられて、安道はため息をついた。「だめですよ、バシアさん、そんな冗談」バシアは安道の耳元で低く囁くように、「嫌ですか、どうしても」「いや、その、どうしても、では」「それなら」舌で舌を絡め取られて、言葉が出なくなった。服を乱され、滑り込んできた掌に翻弄されて、トロンとなつて見上げてみると、浴室に連れ込まれて何度も選かされて…。

隣の芝生

鳴原あきら



初出：Privatter 20170729
 ナイトでも公開中
 http://www5f.biglobe.ne.jp/~Narisama/arab_ntr.html

奥付

『隣の芝生』 鳴原あきら
 2017年8月13日発行
 発行者 恋人と時限爆弾

表紙写真 sharon christina rovik (CCO)
 連絡先 http://www5f.biglobe.ne.jp/~Narisama/

注意：この話は『バシア・バスイールの告白』のネタバシがありますので、必ず、本編を読んだ後にお読み下さい。

